幼小９年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり・支える

－教育当事者としての実践者が対話を通して幼小連携・接続の意味を生成する研修の開発－

松田登紀
（奈良女子大学附属幼稚園・奈良女子大学教育システム研究開発センター・
福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科）
長谷川かおり
（奈良教育大学附属幼稚園・奈良国立大学機構連携教育開発センター）
柿元みはる
（奈良女子大学附属幼稚園）

Observing and Supporting the continuous growth of Children during their nine years of Kindergarten and Elementary School:
Development of a training program for practitioners as educational parties to generate the meaning of collaboration and connection between kindergarten and elementary school through dialogue.

Toki　MATSUDA
(Kindergarten attached to Nara Women's University
Center for Research and Development of Education Systems, Nara Women's University
United Graduate School of Professional Development of Teachers,
University of Fukui, Nara Women's University, and Gifu Shotoku Gakuen University)
Kaori HASEGAWA
(Kindergarten attached to Nara University of Education
Center for Interprofessional Education Development,Nara National Institute of Higher Education and Research)
Miharu KAKIMOTO
(Kindergarten attached to Nara Women's University)

要旨：本報告は、令和４年度に「奈良国立大学機構連携教育開発センター 現職保育者研修プログラム」として実施した「幼小９年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり・支える―幼小連携とは？何を連携し何を接続するのか―」の研修開発プロセスの報告である。政策的に幼小連携・接続を推し進めるような伝達型講習ではなく、より子どもにとって意味のある幼小連携・接続とは何かを、教育当事者である実践者自身が他者との対話の中で省察し、問い直すことで専門性を高める研修デザインを、自治体や複数の学校園と協働する中で開発した。具体的には、これまで幼小連携・接続で課題となっていた「互いの教育への理解」について、自分の当たり前から相手に問うのではなく、創造的に対話が促される仕掛けをデザインしている。その一例として子どもの姿や学びのみとりの具体から自らの当たり前と考える価値観を問い直せるよう、学習参観後に用いる「おたずねシート」を開発した。

キーワード：幼小連携・接続　collaboration and connection between kindergarten and elementary school
自治体と学校間の協働　collaboration between municipalities and schools
研修デザイン開発　training design development
対話　dialogue
省察　reflection

１．はじめに

幼小連携・接続が我が国の課題となって久しい。令和４年度より文部科学省「幼保小の架け橋プログラム」では、「架け橋期 (義務教育開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間) にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すもの」としてモデル地域での実践が始まった。

我が国の幼小連携・接続に関わる研究は、学校制度の課題として議論され、「幼小連携・接続は推進するのが望ましい」という前提のもとにトップダウン型の政策が進められてきている[1]。そのため教育当事者である実践者は「きわめて実務的な次元での課題」[2]を強く感じているとしている。これは、実践者にとって幼小連携・接続を実施すること自体が目的となり、その意味を見出せないまま取り組むことにより負担感が増す現実を示していよう。

そこで本報告では、教育当事者である実践者自身が、幼小連携・接続はそもそも何のために実施するのか、その課題を自身の実践を省察する中に位置付けることで問い直し、子どもにとっての幼小連携・接続について捉え直す研修を開発した令和４年度の研修開発プロセスについて報告する。これにより、幼小連携・接続が与えられた課題ではなく、実践者自身が当事者意識をもち、他校の実践者や自治体とも協働しながら探究していく可能性を示すとともに、学び続ける実践者を支える研修デザインとして、実践者自身がオルタナティブな研修を創造していくプロセスの一例を示す。

２．自治体・４附属の協働による研修デザイン開発

奈良女子大学と奈良教育大学の法人統合により新たに立ち上げられた「連携教育開発センター」内に附属学校チームが組織され、両大学６附属学校園が連携して、毎年二つのプロジェクトを実施することが決定した。プロジェクトには「両附属学校園にとどまらず、大学・研究機関、教育委員会、産業界もしくは海外校など多様な団体・組織と教員の交流も含めて連携し、教育の未来像を創造する研究」が求められている。そこで今年度は奈良女子大学附属幼稚園と奈良教育大学附属幼稚園が連携して「現職保育者研修プログラム　幼小９年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり・支える―幼小連携とは？何を連携し何を接続するのか―」をテーマとしたプロジェクトを実施することにした。

本プロジェクトメンバーは以下の通りである。
竹村謙司（奈良教育大学教育連携講座　教授）
長谷川かおり（奈良教育大学附属幼稚園　副園長）
柿元みはる（奈良女子大学附属幼稚園　副園長）
阪本一英（奈良女子大学附属小学校　副校長）
北尾悟（奈良女子大学附属中等教育学校　副校長）
松田登紀（奈良女子大学附属幼稚園）

なお、実際の研修デザインを検討するにあたり、筆者に加え以下の実践者メンバーと協働した。
丸尾晶子（奈良教育大学附属幼稚園）
山本祐子（奈良教育大学附属幼稚園）
鎌内菜穂（奈良女子大学附属幼稚園）

第１回目（令和４年４月28日）の両園の話し合いでは、プロジェクトの内容については「幼稚園、小学校の参観や協議会を通して、小学生の学びの姿から、また、小学校の教師との対話から、９年間の学びの連続性を考えると共に、保育者自身の考える幼小連携・接続とは何かを捉えなおし、保育者としての質の向上につなげる」ことを確認し、そのために両園が連携して子どもの学びをみとる共通のフォーマットを作成し、それを基に協議会での対話を進めていくことを決定した。

２．１．自治体との協働

本研修デザインを開発するにあたり、奈良県教育委員会及び奈良市こども未来部と連携し、地域の幼小連携・接続の現状及び課題についてお話いただいた。話し合いの中で研修デザインのポイントを見出していった展開は以下の通りであった。

表１　自治体との話し合いから見出したポイント

【令和４年８月４日】
自治体参加者（敬称略）
湊　丈司
（奈良県教育委員会　学ぶ力はぐくみ課　係長）
河﨑光美
（奈良県教育委員会　学ぶ力はぐくみ課　指導主事）
熊井祥子
（奈良県教育委員会　学ぶ力はぐくみ課　就学前教育アドバイザー）
河本　彩（奈良市こども未来部　保育総務課　主任）

奈良県、奈良市の幼小連携の取り組みや課題について自治体参加者より説明があった。県では幼小連携の取り組みは重要課題として意識して取り組んでおり、支援のシステムは構築されているが、「学校園の温度差がある」、「幼小の意識の違いは否めず、研修の場では互いの理解が進むための工夫が必要である」ことや「互いの教育活動（保育・授業）を見た時に、わからなさがある」という課題を知ることができた。

それらをもとに、幼小連携・接続はどちらかがどちらかの方法や文化に合わせるものではないこと、互いの実践や文化などの違いはあるとした上で、同じテーブルについて対話する機会を設ける研修デザインについて両園教員で検討した。その結果、実践者自身がなぜその違いについて気になるのか、「同じ場面を見て、互いの考え（違い）を知ることで自分の保育・教育を捉え直し、自分自身の学びを得る」ことを目的とし、参観した子どもの姿からの問いを立てるために「おたずねシート」を作成することとした。

【令和４年10月３日】
自治体参加者（敬称略）
河﨑光美
（奈良県教育委員会　学ぶ力はぐくみ課　指導主事）

熊井祥子
（奈良県教育委員会　学ぶ力はぐくみ課　就学前教育アドバイザー）
河本　彩（奈良市こども未来部　保育総務課　主任）
研修の趣旨や両園が作成したシートの素案をもとに、その内容や協議会の持ち方について検討した。小学校の学習参観については「生活科」の授業であれば、子ども同士の対話があり幼児教育関係者の立場からは子どもの学びが読み取りやすいのではないか、シートについては、「個人」か「全体」のどちらに焦点を当てるのか、協議会については授業者からの説明を協議前にはあえてせず、先に参観者同士の対話を行ってはどうかなどの意見が出され、それらをもとに、両園で計画の詳細案を作成した。

２．２．４附属の協働―研修デザインの創造

本研修デザイン開発では、実際に奈良女子大学附属幼稚園・小学校及び奈良教育大学附属幼稚園・小学校の４附属実践者が互いの実践の場に実際に身を置き、感じ考えたことを言語化し対話することにより、対話及び省察の仕掛けとなる「おたずねシート」の開発にあたった。

「おたずねシート」とは、自らの当たり前（認識の固定化）を揺さぶるために、他者との対話を方法として取り入れるための仕掛けである。幼児教育施設・小学校、どちらかが正しいわけではなく、どちらかに合わせるわけでもない、子どもにとっての幼小連携・接続を問い直していくために、今目の前の子ども達の姿から、価値観の異なる他者が一緒に新たな意味を見出し創造していくことを目的とする。これにより、それぞれの実践者が省察しそれぞれの専門性を高めていくことを目指す。

表２は「おたずねシート」を試作し、実践者メンバーが活用して学習参観の後に検討した中で見出したポイントである。

表２　学習参観後の対話から見出したポイント

【令和４年10月24日】
＜奈良教育大学附属小学校　２年生参観＞
○「おたずねシート」を活用することで、参観者の自己省察につながるかどうかを検討した。その結果、「どうしてその場面を見ようと思ったのか」という項目と「どうして私はそう捉えているのか（価値観）」の項目で問われる内容が重なって言語化しにくいことが検討事項となった。
○「おたずね（創造的対話のタネ）」をもとに対話をし、ファシリテーターによる問いからより本質的な学習観や自らの実践で大切にしていることについて問い直す結果となったことから、ファシリテーターの役割の重要性について確認した。

【令和４年10月31日】【令和４年11月14日】
＜奈良女子大学附属小学校　２年生参観＞
○「おたずねシート」の修正版を使って、学習参観を行ったところ、参観後に自らの問いを整理しやすいことが確認された。
○参観後にシートを活用した対話の時間を設けた。授業者と参観者との対話の前に、参観者が捉えた児童の姿・学びを元にして参観者同士で感じ考えたことを出し合ったことで、自らの実践を振り返る機会となった。
○その後、授業者と対話の時間を設けることで、参観者が実践で大切にしていることと、授業者が考えていることとの相違点が浮き彫りとなり、それが対話のタネとなり、さらに対話が深まることを実感することができた。
○11月21日実施の奈良教育大学附属小学校参観及び協議会のデザインについて、これまでの自らの参観後の学びを振り返り、以下の点を研修デザインとして意識することを共有した。
・協議会でのグループは、小学校教師と保育実践者が必ず同じテーブルにつくように仕掛ける
・グループ構成では、なるべく教育観やみとりに差異が出るように、異質性の高さを意識する。そのため、同じ授業･同じ場面を見ていることよりも、参観者自身が省察することを言語化し対話することを優先してグルーピングを行う
・グループでの協議は、授業者への質問ではなく、参観者がその場でどう感じ考えたのか、自らへの省察が深まるようにファシリテートする
・協議会では、意見の違いがどちらかの正しさではないことを意識し、結論を出そうとせずに、どうしてそれが大切だと自分は考えるのか、という問いが生まれるようにファシリテートする

上記のように、対話を通して研修をデザインする筆者ら自身にも幼小連携・接続の問い直しが多くみられた。これらを踏まえて開発したのが以下のシート及び研修である。

表３　対話から省察を促す仕掛け―＜事前シート＞

＜事前シート＞―私が考える、幼小連携・接続の意味
■子どもにとって意味のある幼小連携・接続とは、どのようなものだとお考えですか？

■幼小連携・接続に関わる自分の経験
―ポジティブ
（内容記入）
―ネガティブ
（内容記入）

■これまで経験した幼小連携・接続に関わる活動は、子どもにとってどのような意味があったと考えますか？

＜事前シート＞では、政策的で与えられた課題である「幼小連携」という捉えから、自分は何のために幼小連携に取り組みたいと考えるのか、教育当事者としての視点や自らの実践への省察へと向かう視点への転換を促すための仕掛けとして作成した。

表４　対話から省察を促す仕掛け―＜おたずねシート＞

＜おたずねシート＞「正しさ」「間違い」はありません！むしろ価値観の違いを生かすことが互いの対話には大切です ■子どもの姿・みとり ■どうしてその場面を取り上げようと思ったのか ■その場面に対する私の捉え（価値観） ■「おたずね」（創造的対話のタネ）

＜おたずねシート＞では、これまで幼小連携・接続で課題となっていた、「互いの教育への理解」について、創造的に対話が促される仕掛けについて検討した。自分の当たり前から相手に問うのではなく、自分自身がなぜそう考えるのか、という自分への問い直しから対話がなされるように、シートを記入しながら省察を促せるように作成した。

表５　対話から省察を促す仕掛け―＜ふりかえりシート＞

＜ふりかえりシート＞　　協議会を終えて ■今率直に、感じ、考えること ■子どもの学びにつなぐために、今後自分が取り組みたいこと

＜ふりかえりシート＞では、情報や引き出しとして得たことよりもむしろ、自分の考え方や見え方がどう変わったのか、自らの学びについて言語化できるように作成した。

３．研修の実際

本研修は、以下の保育実践(A)のうち１回以上に加え、学習実践(B)のうち１回以上に参加することで学びを深める研修デザインとした。

(A)　附属幼稚園　学年別公開保育 ○奈良女子大学附属幼稚園 「幼児教育におけるカリキュラム・マネジメント ―対話し省察することでつなぐ 実践・記録・研修・会議・社会―」 10.26 ㈬ 4 歳児 /11.16 ㈬ 3 歳児 /1.11 ㈬ 5 歳児 ○奈良教育大学附属幼稚園 「共に創る保育～持続可能な社会の担い手を育む～」 11.11 ㈮ 4・5 歳児 / 12.13 ㈫満 3 歳児 /1.20 ㈮ 3 歳児 (B)　附属小学校　参観及び協議会 ○奈良教育大学附属小学校 11.21 ㈪　　5 限目参観・協議会 ○奈良女子大学附属小学校 1.11 ㈬　　5 限目参観・協議会

３．１．研修実践事例

紙面の都合上、ここでは令和４年 11 月 21 日に実施した小学校での参観及び協議会の事例を中心に報告する。

研修実施日 令和４年 11 月 21 日（月） 研修実施場所 奈良教育大学附属小学校 参加者　　23 名 研修日程　及び　内容 13:45 ～　学習参観 ・１年２組　体育科学習　山村　学　教諭 題材：ころがしっこ「ボールゲーム：攻守分離系（ネット型） ・２年３組　国語科学習　　入澤佳菜　教諭 題材：「きつねのおきゃくさま」（あまんきみこ） 14:30 ～　参観者　「おたずねシート」記入 15:00 ～ 17:00　グループ対話を含む協議会 ・研修の趣旨説明 ・授業者　自己紹介 ・小グループでの対話 (ＡＢＣＤ) ・対話内容の共有 ・指導助言　奈良市教育委員会　学ぶ力はぐくみ課 中野淳子　氏 ・授業者より ・ふりかえりシート　記入

協議会における小グループでの対話では、シートが有効活用され、どのテーブルにおいても子どもの学びの姿から対話がなされていた。グループＡでは、子どもに育てたいと大切にしているものは幼児教育も小学校教育も同じであるということが確認された。グループＢでは１年生が学校に適応するかどうかが問題とされるが、異なる文化への移行と考えれば幼児や児童だけの問題ではなく、大人でも同じであることが話題となった。グループＣでは学習中の子どもの聞く態度について話題になったことから「聞く、というのはどういうことなのか」という本質的な問いが深まった。グループＤでは集団として見た目に揃うように押さえつけてしまうことで子ども自身の声が発せられなくなってしまうことから、「40 分座れるようにすること」が就学準備として求められることへの疑問が話題になった。授業の方法の是非ではなく、目の前の子どもの学びから対話をする中で、教育当

事者として自分は何を大切にして実践しているのか、自分の実践を振り返ることから幼小の教育について問い直す機会となったようだ。

表６は参加者の「ふりかえりシート」の抜粋である。

表６　参加者のふりかえり―＜ふりかえりシート＞より

対話の前は、ねらいの持ち方の違い、扱う教材の違いがあることで、何か大切にしていることに違いがあるのではないかと考えていました。今回の国語の授業、担任の先生のお話から、今は自分の言葉で語ることを大事にされているとお聞きし、程度の違いはあるとは思いますが、自分自身も大事にしていることであるのでどの段階においても大事にしたいことは同じだと思いました。
授業を見ての感想から、「“聞く”とは何をもってそう捉えているのか」という問いをしてもらったことで、どうして自分はそう感じるのか、そこにこだわるのか…と考えることができたように思います。“対話の中で自分を問い直すこと”が実感できました。自分１人だと問い直すことも難しく感じますが、生の実践を見せていただき今回のように様々な先生方の意見を聞くことで自分の保育についても問い直していけるのだなと感じました。
園での育ちを理解してもらうという考えではなく、幼小の９年間（ここではあえて９年間としますが、本当は０歳、妊娠期からのその後と考えています）を、どのように育っていくのか、場所や人、環境は大きく変わることも含めて、幼小の先生が共に、子どもを真ん中にして考え、建設的な議論を積み重ねていく必要があると感じました。

４．成果と課題

本研修はまだ始まったばかりであるが、上記協議会を終えて実践者メンバーで振り返りを行い、本研修の成果と課題について検討した。

成果については､大きく四点が挙げられる。一点目は、誰かの正しさが伝達される場ではなく、保育者と小学校教師が同じテーブルにつく場を設けられたことである。どちらもが対等な立ち位置であり、子どもの姿を通して語る場を設けられたことに意味があった。

二点目は、対話から省察を促す仕掛けにより、これまで幼小連携・接続で最も難しく感じ、そして現場の負担感を増大させていた、「互いの教育についてなかなか理解されない」という負の感情が、今回の研修では見られず、むしろ授業者の先生より「本当に楽しかったです」という感想があったことである。これまでの幼小連携・接続では、自分の実践の当たり前から相手に疑問を投げかけることや、実践の方法論についての是非を検討することになってしまうことが多かった。そこには、これまでの研修にありがちな「正しい実践」からの投げかけの思考が互いの教育を理解すると勘違いされていたことも要因の一つとして考えられる。本研修は「おたずねシート」の仕掛けにより、相手に疑問を投げかけるよりもむしろ自らへの問い直しに思考を転換したことにより、実践者も「楽しかった」と感じられる研修となったのではないだろうか。

成果の三点目としては、上記の＜ふりかえりシート＞にも見られた通り、各々の参加者が各々の実践の経験をくぐらせた言葉で、自分の変化を捉え学びとしていることである。幼小連携・接続をテーマとし、異校種の教師と対話をすることで、参加者の先生方が自分の実践がより捉えられるようになったことは大きな成果であった。またこの学びは、「幼小連携・接続」の意味を各々の参加者が各々の実践を省察することで見出しているということであり、与えられた「幼小連携・接続」の課題を教育当事者としての自らの課題とする研修になっていたことを示している。

最後に、運営に携わった実践者メンバー自身が学校園を越えて対話をすることで学び合えたことである。一つの研修をデザインするために協働することによる学びは大きく、これについては別稿で論じたい。

一方、課題としては二点挙げられる。一点目は、「おたずねシート」で省察を促す文言の弱さにより、省察に至りにくい参加者もあったことである。シートについては今後もさらに改善を重ねていきたい。

二点目は、複数の学校で協働して運営する難しさである。複数の学校で研修をデザインすること自体が研修になっていくことを踏まえ、今後もその在り方について研究を継続していきたい。

謝辞

本研修を企画・運営するにあたり、指導助言いただきました奈良県教育委員会及び奈良市こども未来部の各先生方、保育及び学習公開をしてくださった各先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

文献

1　福元真由美 (2014)「幼小接続カリキュラムの動向と課題―教育政策における２つのアプローチ―」, 教育学研究 ,81,396-407
2　丹羽さがの・酒井朗・藤江康彦 (2005)「幼稚園・小学校の連携についての全国調査報告」, 幼児教育と小学校教育をつなぐ：幼小連携の現状と課題 , お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター ,23-24